小本中（岩泉）を台湾招待へ

嘉義県の有志企画

今夏、全校生徒が対象

「過去の支援の恩返し」

津波で被災した岩泉町の小本中（小野佳保校長、生徒38人）を台湾に無料招待するホームステイ計画が動きだした。子どもたちの心を癒やしたいと台湾・嘉義県の有志が企画。かつて大地震で被災した際、日本に助けられた恩返しもあるという。10日に訪問団が同町を訪れ、岩泉中の校舎に間借りする生徒たちを激励した。

訪問団は、同計画の呼び掛け人となった嘉義県議会議長の余政達さん(50)、妻の何如関さん(41)ら5人。岩泉中では、校舎の3階で勉強する小本中生徒たちにあいさつし、小野校長らとホームステイの日程などを検討した。

現段階では、夏休みの7月27日から8月5日まで生徒38人全員が対象。同年代の子どもがいる家庭にホームステイする。スポーツや文化交流も予定。

パスポート申請費や国内移動費など費用全額を台湾の福田福基金会、大河文化基金会が支出。民間企業を中心にした現地の募金活動が原資になっている。

招待先を探していた台湾有志に県内関係者が小本中を紹介した。

台湾は1999年9月に大地震、2009年8月に台風で甚大な被害に見舞われた。その際、日本から多くの救援物資や励ましが届いたという。

自らホストファミリーとなる余議長は「甚大な被害に立ち向かう日本人の精神に感服した。愛に国境はない。自分の子どものように歓迎したい」と万全の受け入れを約束する。

同校は津波で校舎が壊れ、4人に1人の家庭が被災。仮設住宅から登校している生徒もいるため、親の不安も予想される。小野校長は「保護者の理解を得られれば全員を行かせてあげたい」と語る。

被災地から

チーム北リアスの現地事務所開設準備室が開設し、看板を設置する貫牛利一さん（左）＝野田村

継続奉仕へ拠点準備

野田で団体有志 地域越え連携誓う

青森県や関西の有志でつくるボランティアグループ「チーム北リアス」は11日、野田村の民家敷地内に現地事務所開設準備室を設けた。同村での継続的な支援を目指し、7月中に現地事務所を開設する。

チーム北リアスは八戸高専、弘前大、京都大の教員や学生、NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク（兵庫県西宮市）のメンバーらで組織。震災後、それぞれ同村で活動していたが、連携しようと5月にチームを立ち上げた。

準備室を設置したのは同村野田の団体職員貫牛利一さん(49)宅。7月に同敷地内にプレハブ2棟を建て、事務所と倉庫兼ボランティアスタッフの宿泊施設とする。

貫牛さん宅は、同村の野田中の仮設住宅から歩いて約5分。同チームは今後、被災者のニーズに合わせ、学生や教員を中心にがれき撤去や、仮設住宅で生活する被災者の要望に応えるボランティア活動を行う。

現地事務所の所長となる貫牛さんは「一人ではできない部分もあり、全国からの応援は心強い。これを機に皆さんと一緒に活動していきたい」、八戸高専の河村信治教授は「当事者意識を持ち、被災者と共に活動しながら、復興の手助けをしていきたい」と意欲を示す。

元気と勇気をロックに乗せ

野田 バンドがライブ

大阪を中心に活動するロックバンド「セーリング」は11日、野田村の役場前で復興ライブを開き、村民を元気づけた。

マイクロバスで移動しながら全国でライブ活動を展開するセーリング。震災で大きな被害を受けた同村を応援してほしいと話があり、急きょライブを決めた。

約30人の聴衆を前に演歌やアニメソングなどをロック調に変え、オリジナルの歌も歌った。

「音楽を聞いて少しでも気を休めてもらえれば」と願いを込め、熱唱するセーリング＝野田村

野田村野田の佐々木彩乃さん（久慈工高3年）は「野田のために来てくれてうれしかった。久しぶりに楽しめた」と喜んだ。

ベース担当で盛岡市玉山区出身のテツさんは「全国の人が東北を応援している。自分たちも少しでも役立てるように頑張っていきたい」とエールを送る。

宮古あきんど 力合わせ

中心商店街で復興市 市民ら買い物満喫

宮古市中心部の末広町と中央通両商店街の再起の一歩にしようと宮古あきんど復興市（実行委主催）が11日、12日まで2日間の日程で始まった。B級グルメの出店や市民らによる音楽演奏、落語会など多彩なイベントが繰り広げられ、多くの買い物客でにぎわった。

大漁旗がはためく下、歩行者天国となった末広町通りと中央通りを主会場に各店セールや軽トラ市を展開。

店舗のあったシートピアなあどが壊れ、宮古駅前でのテント販売を余儀なくされていた出崎地区産地直売施設組合の産直も中央通りに面した店舗を借りプレオープン。新鮮な野菜などが並び顔なじみの客で盛況となった。

実行委員長を務める末広町商店街振興組合の佐香英一理事長は「震災直後から泥さらいや片付けに取り組み今日のイベントまできた。お客さんも多く訪れてくれ大変ありがたい」と喜んだ。

中央通商店街振興組合の高橋雅之理事長は「当商店街の被害は大きいが、そんな中でもお客さんに元気な姿を見せられてよかった。ゆっくり、ゆっくり頑張ります」と前を向いた。

大勢の買い物客でにぎわう宮古あきんど復興市＝宮古市末広町

震災孤児のため全国から644万円

宮古市に前市長贈呈

宮古市に寄付金を届ける熊坂義裕前市長

前宮古市長の熊坂義裕さん(59)は10日、震災で親を亡くした子どもたちの奨学育英資金に役立ててもらおうと、全国から届いた644万円を宮古市に寄付した。

市役所を訪れた熊坂さんは「宮古市のために使ってくださいと寄せられた。一助にしてください」と述べ、山本正徳市長に渡した。

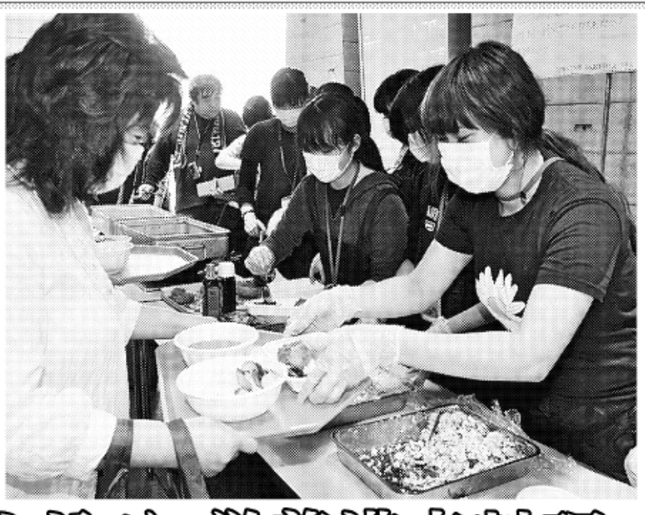
市によると、両親が死亡したり、行方不明となった18歳未満の「震災孤児」は5月31日時点で6人。

熊坂さんは市長時代の経験を踏まえて活用策を提案。山本市長は「市で検討して有効に使いたい」と感謝した。

熊坂さんの元には全国の友人、知人から義援金や見舞金が続々と届いた。継続して支援したいという強い要望もあり、新たに銀行口座を設けたという。

心込め 栄養満点料理

大船渡で相模女子大生 炊き出しに汗


自分たちで考えた料理を振る舞う相模女子大の学生（右）＝大船渡市

相模原市の相模女子大の学生ボランティアグループ「COOK(こっく)」のメンバーが中心となり大船渡市の避難所を訪問。同大のある相模原市が震災直後から大船渡市を支援しており、学生たちの取り組みに協力した。

グループの平沢実穂子さんら学生有志34人は11日、大船渡市の避難所の健康に配慮し自分たちで考えた料理を振る舞った。大勢の市民が学生たちから栄養満点の食事と復興への力をもらった。

今回の炊き出しは同大の学生有志が11日、軽乗用車1台を同センターに贈った。

中古軽乗用車1台を贈ったのは、東京都の坂本穣治さん(56)。震災直後、ボランティアで同市に入ったが、移動手段を持たない高齢者に支援物資が届きにくい実態を目の当たりにし、寄贈を考えた。

大船渡サポートネットワークセンターのスタッフに軽乗用車を贈る坂本穣治さん（左）＝大船渡市大船渡町

都内在住の有志30人から寄付を集めて中古軽乗用車を25万円で購入。自ら運転し、鵜浦代表の自宅に届けた。

坂本さんは「寄付を呼び掛けると4日足らずで集まった。一日も早い大船渡の復興に役立ってほしい」と願っていた。

心通う感動テノール

大船渡 新垣勉さんコンサート

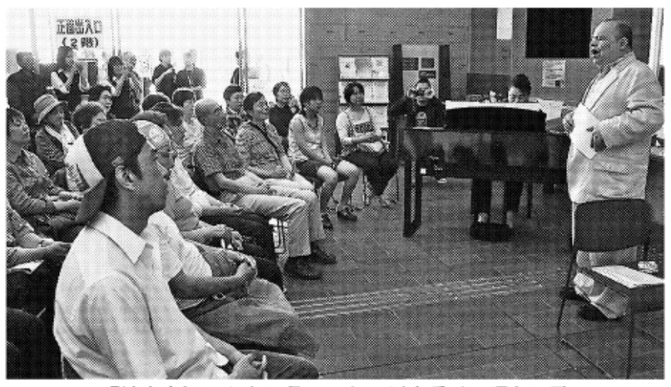
全盲のテノール歌手、新垣勉さんは11日、避難所になっている大船渡市盛町のリアスホールでコンサートを開いた。「言葉では伝えられないことを歌を通して伝えたい」と8曲を熱唱。温かい歌声に、訪れた約100人の中には目頭を押さえ聞き入る姿もあった。

新垣さんは「人と人の絆を大切に曲を選びました」とあいさつ。

同市大船渡町の自宅が被災し、現在は同市猪川町のアパートで暮らす里見節子さん(55)は「素晴らしかった。心に染みたし慰められた」と感激していた。

新垣さんが3日に横浜市で開いたチャリティーコンサートでの募金を義援金として戸田公明市長に贈呈。

東日本大震災の発生時刻である午後2時46分には、集まった避難者らと1分間の黙とうをささげた。


「絆を大切に」というメッセージを乗せ、温かい歌声で聴衆を魅了する新垣勉さん（右）＝大船渡市

復旧へ 三鉄がんばれ

久慈の住民ら 多彩な催しで応援

第1回さんてつ・北催（実行委主催）は11日、久慈市のリアス縁市（三陸鉄道久慈駅前で開かれた。

鉄道の復旧に向けた機運を高めようと企画。住民らのメッセージが書かれた横断幕が掲げられ、地元団体による出店や餅つきでにぎわった。

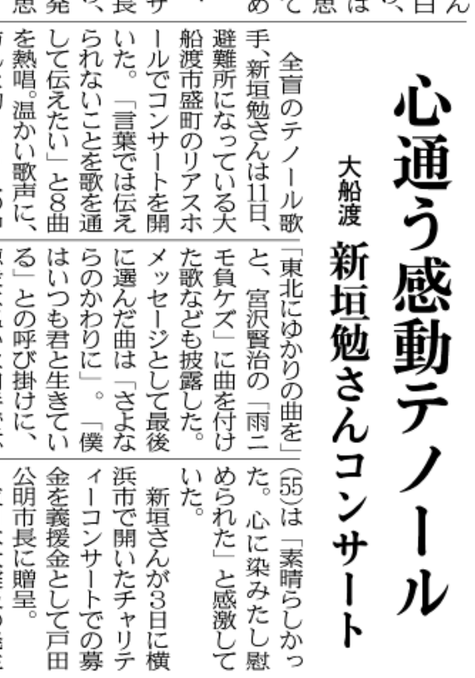
横断幕の設置セレモニーには同鉄道の望月正彦社長も参加。「みんなの希望を乗せて走れ」など住民の思いがこもった幕をお披露目した。

駅前では久慈地域の6団体が豆腐田楽やドーナツ、地元産の野菜やコンブやフノリなどの加工品、衣類を販売した。

野田村から三陸鉄道で訪れた新山侑(あつ)ちゃん(5)は「餅つきが面白かった」と笑みを広げ、母幸子さん(40)は「時間はかかると思うが、何とか復旧してほしい」と願いを込めた。

実行委の構成団体、NPO法人やませデザイン会議の田中卓議長は「三鉄の復興に向け、地元から応援の声を発信していきたい」と思いを語る。

11月までの毎月第2土曜、久慈駅前を中心に陸中野田駅や普代駅でも開催を計画している。


重いきねを持ち、餅つきを楽しむ子ども＝久慈市

各地から善意の車

被災地に寄贈

大船渡地域での物資の運搬用に

東京の有志30人

大船渡市の被災地ボランティアをつなぐ大船渡サポートネットワークセンター（鵜浦真紗子代表）の活動を支援しようと東京都の有志が11日、軽乗用車を同センターに贈った。

中古軽乗用車1台を贈ったのは、東京都の坂本穣治さん(56)。震災直後、ボランティアで同市に入ったが、移動手段を持たない高齢者に支援物資が届きにくい実態を目の当たりにし、寄贈を考えた。

大船渡サポートネットワークセンターのスタッフに軽乗用車を贈る坂本穣治さん（左）＝大船渡市大船渡町

都内在住の有志30人から寄付を集めて中古軽乗用車を25万円で購入。自ら運転し、鵜浦代表の自宅に届けた。

坂本さんは「寄付を呼び掛けると4日足らずで集まった。一日も早い大船渡の復興に役立ってほしい」と願っていた。

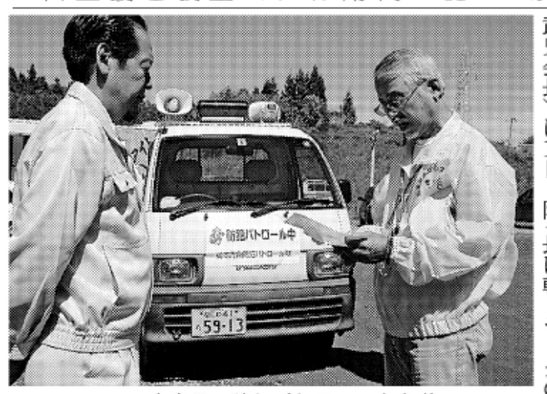
陸前高田の防犯巡回に利用して

大阪の社福協

大阪市鶴見区の榎本社会福祉協議会（木村武史会長）は11日、陸前高田市へ青色回転灯付きのパトロール車を贈った。

木村会長と辰己一也鶴見区長らが陸前高田市仮庁舎で、戸羽太市長に軽トラックのパトロール車と防犯グッズを寄贈。水や食品、応援メッセージの寄せ書きも届けた。戸羽市長は「ご支援、応援を頂き市として一丸となって頑張りたい」と感謝した。

贈られた車は大阪府で2004年、最初に導入された青色回転灯パトロール車。陸前高田市では、防犯の広報やパトロールに使っていた車も津波で流されていた。


戸羽太市長へ防犯パトロール車を贈る木村武史会長（右）＝陸前高田市

大槌職員の移動などに役立てて

外車メーカー

プジョー・シトロエン・ジャポン（本社東京都）は11日、大槌町に「職員の移動や物資の輸送手段に役立ててほしい」と同社の車両3台を贈った。

「東日本復興支援車両」のステッカーが張られ、後部ドアにはティエリー・ポワラ社長のメッセージ「岩手県の復興のための支援車両です」がフランス語で書かれている。

同社の英信司営業部地区担当マネジャーとアルゴスの四日市隆行専務取締役は同日、東梅政昭副町長と懇談。東梅副町長は「多くの車が流され、震災後はレンタカーを借りるなどしていた。非常にありがたい」と感謝した。英マネジャーは「大きさも異なるので用途に合わせて役立てていただければ」と復興を願った。

大槌町に贈られたプジョーやシトロエン

新たな釜石像 知恵出し合い

復興へ意見交換

釜石市の復興まちづくりワークショップは11日、釜石市新町の合同庁舎で始まり、住民と建築関係者らが今後の都市計画について議論を交わした。まとまった意見を基に市の復興まちづくり委員会が復興計画の骨子を検討する。

初日は、市内でも特に被害の大きかった鵜住居地区と東部地区について議論。工学院大建築学部の遠藤新准教授が総括コーディネーターを務め、防災、地域性、産業、居住の4テーマに分かれ意見をまとめた。

各グループからは▽釜石ならではの特性を生かした防災計画▽既存の高台を活用したまちづくり▽歩いて楽しめる商店街の形成▽高齢者でも利用しやすい避難路形成―などの意見が出された。

ワークショップは13日まで。12日は午前9時から合同庁舎、13日は午前10時から岩手沿岸南部クリーンセンターで。釜石市民なら誰でも参加できる。

問い合わせは市復興プロジェクトチーム（090・6067・1205）へ。

「絆を大切に」というメッセージを乗せ、温かい歌声で聴衆を魅了する新垣勉さん（右）＝大船渡市

今後の都市計画について議論を重ねるワークショップの参加者＝釜石市

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。